



# 漫 録



## 雪、そら事、往來商賣

十 八 公

◇

一月末の内務省土木局は、昭和九年度時局匡救土木事業豫算の府縣割當額の内偵やら、減額喰止めやらに上京した府縣の土木當局で、大變な賑ひを呈し本誌の編輯室も、そのあほりを喰つて千客萬來であつた。足だまりに來て頂くもの、間接偵察に足を運ばれるものと、いろ／＼な方々の中から、話の口占を引いて見ると、時局匡救土木事業は、政府に於て昭和七、八、九の三年度間施行すると言ふのに九年度の國の豫算は、これに雀の涙しか計上してゐない、

看板に偽りこそないが、中味が悪くて使ひ途がハンパで何うにもならない、何とかして貰はなければと言ふのが、各府縣共通の不平であり愚痴である。曰く

「私の縣には、八年度までに中途まで道路改良事業をやつてゐるのは、勿論九年度に於ても相當な匡救豫算が配當せられるものと思つたからのことなのに、それを、今日肩すかしを喰つては、今までやつた仕事の效果はまるで現れない、こんな中途半端なものを完成するためには最小限何十萬圓を要するからこれだけは是非我が縣に配當してもらい

たう」

「私の縣の何橋は、八九兩年度で架換する豫定で八年度では下部工事をやつた、九年度に相當額の配當を受けなければ、上部工事が出來なくなる、橋脚ばかり突つ立てたばかりでは、物の役に立たないばかりでなく酬態を後世に晒すことになつて忍びない……だからこれを仕上げるに足るだけは配當して欲しい」

「トンネルが人口ばかり掘れただけで穴倉で終りさうだ、隣りの國の風を通すやうにしてほしい」

「九年度までは働いてもらうつもりで失業の連中を浮び上らせてゐるのに、配當が少くては、人件費の賄ひがつかなくなつて、また世の中へ抛り出さなければならなくなるのは情に於て忍びないばかりでなく由々しき社會問題だから人件費が賄ひ得る程度の事業費は是度配當して欲しい」

何れも一應も二應も尤もな理由で、これらの申出を聞かされる内務當局の人々も困惑の體である、子供からせがまれる物は皆買つてやりたい物ばかり……だが、財布の中に

はチラリホラリしかお金がない、何の子供に何を買つてやればあの子供には何も買つてやれない。財布の口を開けて見たり閉めて嘆息したり、なか／＼親父どん苦惱のことではある。

さて事業費の配當が決定したら、各府縣は何うするだらう。配當はまだきまつてゐないからこゝしはらくは最も重苦しい沈黙の日が続くだらうが、蓋を開けたら蜂の巢をつついたやうに、ワン／＼言つて來るか、それとも泣き寝入りで、ブチまけた店の仕末を澁々とやつて行くか。半分の危惧と半分の興味とで、その日待つてゐる。

まさかスキーのジャンプ臺のやうに、終端から飛び上るか、地に潜らなければならぬやうな道路や、宇治川の合戦にこそ武人の功名の素因を作つた橋板のない橋(？)、さては小野の小町から登録侵害の訴訟を提起されさうな、或ひは冷凍會社から借用申込を受けさうなトンネル(？)を作つて、そのまゝ抛り出してゐられたらコトである。ここに内務當局と地方當局双方の惱みがある。

昭和七年度の匡救事業の執行中に近來にない大雪に逢つて進捗を阻まれて困つたが、八年度こそは再びそんな事のない様にして見せると雪の多い地方の土木當局から去年の今頃聞かされたものだが、今年もまた去年に優るとも劣らぬやうな降雪で、鐵道事故だけでも相當冬の新聞を賑してゐた。まさか今年はやうな大雪はあるまいと、多寡を括つてゐたとしたら、去年の周章狼狽を再びくりかへすのでは無からうか。

お天道様は人間に相談なしで雨風や雪を降らせる。こんな筈では無かつたがと人間界で愚痴つても、羽衣の天人のやうに、「天に偽りなきものを……」と洒々落々と天上界で勝手氣儘に天氣を作つてゐるのだから、空事をアテに仕事する人間の方が歩が悪い。

昭和九年度の匡救事業豫算に就ても、聊かこの雪の話に似たものがあるやうな氣がする。まさか豫算を計上した政府を天人扱ひにする氣もなし、各地方の人を凡人扱ひする

氣は筆者夢さら無いが、地方の人は、九年度に於ても少くとも八年度と同額ぐらゐの配當は貰えるだらうとアテにしてゐたらうし、政府に言はせれば、前から九年度にはいくらやるからそのつもりで、仕事を計つてやれと約束した覺えは無いと言ふかも知れない。どちらが良いか悪いか、春場所が終つてヒマであらう行司に軍配をまかせて私はこの土俵を降りる。

東京地方は永らく降らないで、地上の濕氣が缺乏して流感猖獗の因をなしてゐたが、冬の名残り節分の日に十センチあまりの雪があつた。二三日前の雨とともに、やれ／＼と思はせたが、此の雪は、流感退散のみの御利益で無く、永らく職にありつけないで、流感以上の苦しみを續けてゐたであらう本所深川方面のルンペン君をも活氣づかせ、道路の除雪人夫は傭はれて相當のお手當を頂いた。市役所ではこれがため二萬圓の金が消えさうだ、ルンペン君も久しぶりに美味しい晚餐にありつけたらうと思つて他人事なが

ら喜んでゐたら新聞によれば、お手當金が、デンキブランの屋臺店に走らせ、それが嵩じて心臓癱痺で頓死した者も出た。あはれ草葉の露ではなくて路傍の雪と消えた命。生活の糧にすべき賃金をデンキブランに向けたことを責めるより前に、久しぶりに手に入れた賃金に狂喜した程飢えさせてゐる社會にも一半の責はある。畸形的社會生活の所産として、此の世間の一隅の些細な出來事と看過しないで眞剣に探究して整形手術をして呉れるお醫者が欲しい。

◇

お商賣柄とは言え八百屋、魚屋、乾物屋の類は、道路に商賣物をちかに並べたり、陳列臺をセリ出してゐるのが多く。通行の邪魔をしてゐるのも少くない。商賣物を行人の眼につき易い所に出すことは、宣傳第一の當世では商賣戦術上有效なことにはちがいないが、あまり混雜してゐる通りなどで、この手にブツつかると、その店に一種の反感を抱かせて買ひたい物でも買ひたくなくなる時がある。この傾向(？)は地方の中小都市で特に眼立つて多い。

そのため窄められた道路で、馬車と自動車とが鼻を突き合せたまゝ二進も三進も行かない圖など、ザラに見る所である。交通が繁激であるから擴張する必要があると言ふのでやつとの思ひで道路を擴張すると、道路が廣くなつたからそれだけ突出しても良からうなどと言つて堂々とセリ出して來る手合などまつたくウンザリしてしまふ。一尺一寸でも廣く通行に利用して欲しく、一粒の砂利でも路面維持のために大切にやる心掛で働いてゐる道路關係者の眞摯な努力も此う言ふ没分曉漢に出會ふと、腹が立つ事夥しい。道路を占用してはいけなさと注意すると、おかみをカサに着て威張ると言ひ立てるし、丸腰では利目がないと交通取締として警察官に注意してもらうと、官權濫用だの何だのと筋違ひの言ひがかりをする。度し難きかな衆生と！嘆息する外ない。

ある縣のある街の出來事だが、ラヂオ屋開店で、時流に適應しようと、大々的に店構えを造作し、そのショウインドウを作るのに、道路敷をかなり侵して造りはじめた。縣

廳のお膝元、しかもメインストリートなので、直に縣土木當局の眼に觸れ、ラヂオ屋君がお役所へ呼び出されて、撤退方を申し渡された。ところがそのラヂオ屋君が、電波のやうな湯氣を立てて開き直つて曰く「何處の何屋何兵衛ども、何屋何左衛門ども同じ様にハミ出して陳列臺を造つてゐる。俺ばかりぢやない。何で俺ばかりを呼び出して叱るんだ、みんなが退いたら俺も引く、さうで無かつたら御免蒙る、こんな片手落ちのお扱ひには服し兼ね申す」とキツパリとことわつてサツサと歸つてしまつた。お役人の側では、新に造作しはじめるものから先づ整理しようとしたのだが他人もやつてゐるからおれもこれからやると言ふのだ、理屈と膏藥は何處にも附く、何とかにも三分の理があるとか。此うなつて來ると理屈も何も通じない。

釋迦にも提婆とか、およそ物事を行ふのに邪魔の入らないものは無いが、此うした各人の些細な交通道德への反逆（？）が、何れだけ他人に迷惑をかけることか。自分達の出した税金で作つてもらふ道路を、金だけの値

に利用しない大きな損を悟らないで、眼の前の小利に汲々としてゐるケチな人種の根性を叩き直す神經科のお醫者さんに誰かなつて呉れないものか。

◇

商賣往來と言ふが、往來で商賣をやつてゐるもの尤なるものに夜店・露店がある。年の暮の銀座など、十日も前から丸太を組んで店構えをして居り、晦日近くなると、夜具まで持ち込んで寝泊りして商賣してゐるんだから、相當儲かるに違ひない。あの夜店にも何々會と言ふユニオンを作つてゐる、今は知らぬが昔は連中の元締は懐手してゐて相當金が入つたもの由。いつぞやある小説で、久し振りに會つた友達から、銀座何丁目何々書店だからやつて來て呉れと名刺を貰つたので、それを頼つて行つたら、銀座の何丁目には違ひなかつたが、家作を構えた書店だとばかり思つてゐた所何と家作は屋臺で、頭上に星がまたいてゐる夜店だつたので、幻滅の悲哀を感じたと言ふ所があつた。堂々とした店舗を構え切れないで銀座の大通りに斜に貸

家札を貼り出さなければならぬ世の中では、家作を構えた何々堂書店と、露店本屋とどちらが儲けの割が多いのか、私は知らない。が、此れ等の夜店が相當の永住性(?)を持つてゐることは否めなくなつて來た。道路本來の使命と相刺するか何うかなんてやかましい事は詮議立てることをやめる。人の世の姿、これも一つの存在として面白からう。

往來商賣には此の外大道藝人がある、古くは松井源水の獨樂まわしから、軍中膏蝦蟇の油、一時は銅羅を叩く支那曲藝人のシーナテナがあつたが、交通の頻繁に追はれて子供相手の紙芝居屋さん達と共に、場末の露路や空地に追ひやられてしまつた。今頃あの頓狂な支那手品師たちが、何處に居るか、時には懐かしくも思ふ。

近頃のものでは靴みがき屋さんがある。錢湯の腰かけのやうな足臺を鋪道に並べて街角などに御同様が三々五々仲よく店(?)を張つてゐる、一回五錢だつたのが、近頃は四錢均一になつてゐる。あれで、相當商賣になるものと見えて商賣をやる者が殖えて來た様だ。

夜店とは、商品を並べてお客の需めによつて品物を賣るものとはかり思つてゐたら、詰將棋屋が、下足札ほどもある將棋の駒をバタリノ、やらせたり、碁石にあらぬ白黒の饅頭大の碁土(?)を並べた聯珠屋さんがある。先方の註文條件通りで詰め得なかつたり、聯珠が四三にならなかつたりしたら、五十錢で小さい本を買はされる。これなどは、遊技場と言ふべく夜店の名にはチト不相應である。

それに最近では疊一帖もあるやうなコリントゲームを並べて飴玉大のボールを丹念に轉がして遊ばせるコリント屋が出て來た。あれはやる御本人よりも、やり手の姿態を横で見ている方が餘程面白い、百面相ソツクリである。

鑑札のお下げ渡しは以ての外ながら、往來商賣と言ひ得るものに新しいストリートガールがあるが、これを書き立てる材料も持たないし、鑑札なしの事だから自然悪口に傾く、すると又去年の夏、女のアツパツパ排撃をやつて氷川町主人のゲキリンに觸れたことがあるから遠慮して、この筆を措く。